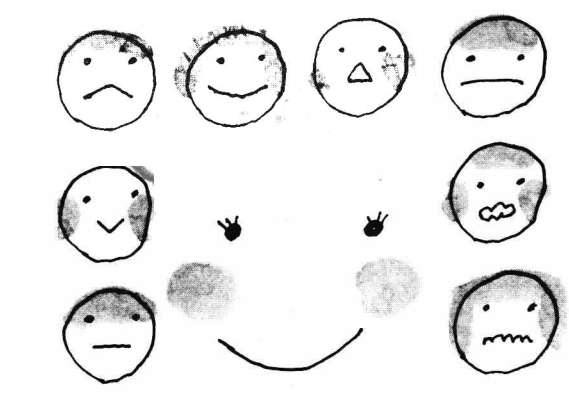
0095-167150-2253(0)

どろんこ保母のうた

山口　桂



講談社

NDC 376　19.4cm

どろんこ保母のうた

定価　五二〇円

昭和47年4月20日　第1刷発行
昭和47年9月24日　第2刷発行

著者　山口　桂

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2―12―21
郵便番号112
電話　東京(03)九四五―二二一(大代表)
振替口座東京三九三〇

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

☆落丁本・乱丁本はおとりかえします

© KEI YAMAGUCHI 1972　PRINTED IN JAPAN

0095-167150-2253 (0)　(学2)

どろんこ保母のうた

保母一年生

「人のいやがるこんな所へ来てくれて、ほんとにありがとう。きたない所だけど、よろしくお願いしますね。二、三日前、役所のほうから通知はもらっていたけど、なにせお寺のお嬢さんでしょう、本当に来てくれるかどうか、たぶんいやがられるんじゃないだろうかって、心配していたんですよ」

「昔、この建物は工場だったの。工場といっても内職に毛の生えた程度のものだったけどね、地区の人たちの暮らしが、ちょっとでもよくなるようにっていうので造られたの。でも、もう時代が時代でしょう、このごろではもうそんな必要もなくなってしまったし。そこで、建物は古いけど、保育所にしたらってことになったの」

「今年で五年目。園児は七十人ちょうど。家庭環境のせいで、よそと比べると荒けずりな子が多いの。することは少々乱暴だけど、それでも十分人なつっこいところもあるし、人情はよくわきまえているし、最初は驚くでしょうけど、すぐ慣れますよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

まえがき

天下の講談社が、ワタシの文を本にしてやろうとのお話。ワタシは有頂天になった。しかし、いよいよ出版という段になって、「ほんとにこんなでいいのだろうか」ワタシはしりごみを覚えた。

美しくも哀しい、感動的な人生を生きておられる多くのかたがた。そんなかたがたに引き比べ、ワタシの保母生活ときたら、しみじみなんてまるっきりゼロ。キョロキョロよそ見ばかりの十五年であったようだ。

好奇心と行動力だけは人一倍。何かにつけてはカーッとこみ上げ、なにくそとパッパッとやってしまう。後先の見さかいもなく言いたて、書きまくる。しかしいつかは正気に立ち返り、それが、まるっきりの喜劇でしかなかったことに気がつく。そして、この次からはと反省するのだが、次の場合も、またカーッとなってしまって、前と同じ繰り返し。

美しさ、尊さ、気高さなどとは、およそ縁遠い、ただ騒々しいだけのスチャラカ人生。

その時その時は一生懸命のつもりで、力いっぱい取り組んではきたのだけれど、しょせん、五合ビンに一升の酒入れようと、汗かいていただけのことなのか。

ままよ、ワタシはワタシ。いくら考えてみたとて、これまでの十五年という年月、取り

もどせようものでもなし。

編集長様が、こんなワタシのどこに目をとめてくださったのか、皆目見当もつかない。たぶんは、世の中、こんな男らしい女もいるのだという、紹介のためでもあろうかと思って、書き上げてしまったようなしだい。

これを読んで、狭苦しいこの世を、少しでもひろびろと生きていただけたらと思うものであります。

昭和四十七年春

山口　桂

目次

まえがき 1
保母一年生 8
親のいない子と 19
恋知りそめるころ 一 26
恋知りそめるころ 二 37
夢いっぱいの新婚時代 55

親って泣き虫　64
かげろうの立つ道で　70
強い者と弱い者と　90
交通事故　97
子どもの素顔　106
水まきと毛布　113
女の坂道　一　121
女の坂道　二　130
運動会の前に　147
くじら号乗り入れ　153
怪獣画伯　166
風紀委員長　171
赤いばかりがタコじゃない　184

遠足がきまるまで　193
遠足日和　200
たんたんぼこぼこの季節　217
扉修理　226
ミルク動物園　239
善意の結末　248
保母をやめるの記　255
あとがき　260

イラスト・工藤　恒美

装　　丁・長尾みのる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「よその保育所に比べると、そりゃやっぱり少々キツイようだけど、ここで辛抱できたら、のちのちどんな所へ行ってもらくに勤められるワよ」

赴任のあいさつに出向いたワタシへの、主任保母の案内やら励ましやらのことばであった。

丘の上に立つ半二階の建物、これがワタシの最初の保育所だった。段々地に目いっぱいのスペースをとったからだろう、上から見下ろせば一階建て、下から見れば二階建てという、凝った造りになっていた。それで階下の保育室からは、上の階の基礎になっている石垣が丸見え。でもそこに、なんともいえぬ良さがあった。石垣そのものが壁面だなんて、今時これを街中に造るとしたら、たいへんなお金がかかることだろう。ヒンヤリと湿っていて、地下牢の感じがしないでもないが、ちょっと時代劇の中にいるような気分もあって、何もかも物珍しい年ごろのワタシをうれしがらせたものだった。

翌日、生まれて初めて教壇に立った。

「今日からね、ここにおられるきれいなおねえさんが、皆さんの先生です」

七十人の園児、小さな肩を並べ、きちんと足をそろえ、小人の国のようないすにかけて、ズ、ズイッと眼下に居並んでいる。

たかが三つや四つの子どもたち、なんのことやあると思っていたワタシだったが、一同を見渡しているうちに、なにかヒシヒシと押し寄せるものを感じはじめた。子どもとはいえ、七十人といえばちょっとした集団。その集団が物珍しさも手伝ってか、いっせいにこちらを見つめている

のである。なにかこう、居たたまらなくさせるような圧力があった。テレる、てれる。自分でもおかしいくらい、どうしようもなくアガってしまった。目の先がかすんで、コチコチになってしまった。

「お名前は大栗先生といいます。いっしょに言ってごらん」

「オオグリセンセ」

黄色い声が一様に返ってきた。ワタシは、いよいよボーッとなった。

「そう、大栗先生。もう一度」

「オオグリ先生」

彼らはいちだんと声をはりあげる。

「そうです、大栗先生、忘れないようにね。それじゃねえ、赤組さんの人、はい、手を挙げてごらん」

右端の三列ほどが、サッと手を挙げる。

「はい、よろしい。赤組さんの人たち、あんたたちの先生がこの大栗先生です」

「ウワア」

手を挙げなかった子たちが、そちらをニコニコ見て叫んだ。いかにもくったくのない雰囲気。

「さ、それでは」

主任先生がオルガンのほうへ歩いていく。紹介式は早くも終了、ここからいつものような生活が始まるのであろう。

そろって「おはよう」の歌を歌う。何か動作を始めると、集団がほどけて、一人一人のかわいい子どもにかえる。精いっぱい口を開けて、歌うことだけに一生懸命になっている子たち。

みんなが歌い終わっても、主任はオルガンをやめない。すると、先ほど手を挙げた一団が、オルガンに合わせて下へ降りはじめた。

「先生、さあ付いていって」

「あ、ハ、ハイッ」

主任先生に言われて、ワタシは、昨日の地下牢保育室へ、あたふたと降りていった。今日一日くらいは、ゆっくり保育参観ですませてくれるのでは、なんて、虫のいいことを考えていた矢先だった。

常々しつけられているのだろう、彼らは机の周りにさっさといすを引き寄せて、ワタシを目で迎え入れた。

慌てて教卓の前へ立ったワタシ。さてこれからどうしたものやら。しょうことなしに人数を数えてみた。

「二十一人」

さて、さてっと。

「エーとね、先生のお名前、もう覚えてくれましたか」

家で考えてきた第一声。ところが、あれだけ大きい声で「オオグリセンセ」と叫んでいた彼ら、今度はそろって知らん顔。

「あら、早、忘れたのオ」

ワタシはまごついて、この四歳児たちを見直した。そしてまた、頭に血が上ってくるのを覚えた。

これが、初対面のおとなに対する警戒心とか、はにかんだりオドオドしたりの態度だったら、それはそれでこちらの出方もある。いくら初出勤であっても、ほやほやの先生でも、四歳と二十歳の違いだ。しかし、にこやかに問いかけているワタシの目に映るのは、世にも不遜な、図太い態度の一群である。雲助みたいな目付きとだらしなさ、まったくワタシをなめきった態度。「荒けずり」なんてものじゃない。「最初は驚くでしょう」のほうは、当たりすぎるほど当たったが。

それでなんだな、ワタシがここへ赴任すると聞いたとき、友だちが口々に、「かわいそうにねえ」とか、「あんた苦労するワよ」など言ったのは。でも、ここで負けてしまっちゃだめだ。なんだこれくらいのこと。ワタシの心に闘志が盛り上がってくる。

「ワタシのお家ね、ここから見えるのよ」

ワタシは窓の外を指さした。川原を越した真向かいの山のすそに、お寺の大きい屋根がかすんで見える。ワタシの指のほうへ、彼らも目を移した。

あの屋根の下で、お母ちゃん、今ごろ何しているだろう。お掃除すませてるかしら、それとも、ひょっとして、庭の草抜きしながら、こちらの様子見てるんじゃないだろうか。いつまでも心配性なお母ちゃん。駆けて帰りたいような里心が、ふっと頭をもたげる。

「ね、ワタシ、あのお山の下のほうの、黒いお屋根のお家から来たのよ」

子どもたちのほうへ目をもどしながら言った。

机に両ひじついた子。足を広げて片方を前の子のいすにのっけている子。ふんぞり返って腕組みしている子。こちらを見イ見イ、隣の子と何かささやき合っている子。みんな男の子ばかり。女の子はというと四人、隅っこにちんまりと固まって、こちらはそろってきまじめな表情。

ワタシは、一人一人を、はっきりと目でとらえていってみた。だれも格別な反応は示さない。そろいもそろってニタニタしているだけ。

「わたしってか」

ワタシの視線のすきを見すまして、両ひじついた子が言った。あたりの子がゲラゲラと笑い出す。なんてことを——ワタシは完全にのぼせ上がった。どうしたらいいんだろう、この子たちの態度。本当に、こんな保育所へなど来るんじゃなかった。もっとましな所からもさそいは来てたんだけど、あの時学長が、「あなたでなければ、あなたこそはと見込んで」なんておだてるものだから、ついうかうかと乗せられてしまって、「先生のよろしいようにお願いします」なんて言ってしまったんだ。それにしても、学生時代って気楽でよかったなあ。何かやりかけていやになりゃ、ハイそれまでよでやめればよかったし、ちょっと困ったことが起これば、友だちの中へ逃げ込めば事すんだし。あのころがなつかしい。もう十年も前みたいに遠いことのように思える。

しかし、もうここで一歩を踏み出してしまったのだ。道を替えることはできない。ひるんでありともどりするわけにはいかない。

「ワタシの名は大栗先生。さあ言ってごらん」

「もうわかっとるワッ」
そりゃそうだ。考えてみると、朝からの話題、オオグリ先生から一歩も出ていないもの。しかし「わかっとるワ」と言い放った子を見ると、思わず涙が出そうになる。たったこれくらいのことなのに、なんてまあむずかしいんだろう。ワタシは溜め息をついてしまった。
「先生ね、皆さんのお名前知らないのよ。今日会ったばかりでしょ。それでね、皆さん自分のお名前言って、先生に教えてちょうだい、ねッ」
普通ならこれでいけるはずである。学校でもたしか「困った時は自己紹介させるべし」と習っている。ところがまるっきり返答なし。
「はい、あなた。そうよ、あんたよ。あんた、なんていうお名前なの」
そのころでも珍しかった坊主頭、鼻の先っちょになんだか黒いものがこびりついている子。彼は指名されたとたん、うつ向いて、あらぬかたへ目を向けてしまった。
「その子、なんていうのッ」
隣の、先ほどから両ひじついたままの子に聞いてみる。
「シャンコさ」
「ええッ、しゃんこ」
またしてもゲラゲラ。これじゃまるっきり、『坊っちゃん』の「ナモシ」じゃないか。しかし、気を取り直してまた言ってみる。
「ねえ、あんた、あんたの名前本当にシャンコっていうの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.